

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されて
いる事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed
with this Office

出願年月日

Date of Application:

2002年 6月25日

出願番号

Application Number:

特願2002-185235

[ST.10/C]:

[JP2002-185235]

出願人

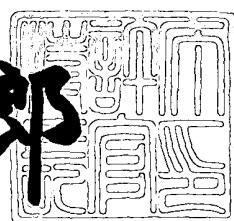
Applicant(s):

株式会社デンソー

2003年 4月22日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

太田信一郎



出証番号 出証特2003-3029563

【書類名】 特許願

【整理番号】 P000013192

【提出日】 平成14年 6月25日

【あて先】 特許庁長官 及川 耕造 殿

【国際特許分類】 H02K 3/04

【発明の名称】 回転電機のセグメント順次接合ステータコイル

【請求項の数】 4

【発明者】

【住所又は居所】 愛知県刈谷市昭和町1丁目1番地 株式会社デンソー内

【氏名】 五郎畠 哲也

【発明者】

【住所又は居所】 愛知県刈谷市昭和町1丁目1番地 株式会社デンソー内

【氏名】 鎌倉 洋一

【発明者】

【住所又は居所】 愛知県刈谷市昭和町1丁目1番地 株式会社デンソー内

【氏名】 平野 均

【特許出願人】

【識別番号】 000004260

【氏名又は名称】 株式会社デンソー

【代表者】 岡部 弘

【代理人】

【識別番号】 100081776

【弁理士】

【氏名又は名称】 大川 宏

【電話番号】 (052)583-9720

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 009438

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】	明細書	1
【物件名】	図面	1
【物件名】	要約書	1
【ブルーフの要否】	要	

【書類名】 明細書

【発明の名称】 回転電機のセグメント順次接合ステータコイル

【特許請求の範囲】

【請求項1】

径方向へ順番に並んだ偶数個の導体収容位置を有するステータコアのスロットに収容され、順次接続されてM (Mは3以上の整数) 相電機子コイルの相コイルの1ターンを構成する多数のセグメントを有し、

前記セグメントは、互いに所定ピッチ離れた一対の前記スロットの互いに異なる導体収容位置に個別に収容される一対のスロット導体部と、前記両スロット導体部から前記ステータコアの一端側へ突出して頭部側コイルエンドを構成する頭部と、前記両スロット導体部から前記ステータコアの他端側へ突出して端部側コイルエンドを構成する一対の飛び出し端部とを有し、

前記頭部は、略U字状の頭部先端部と、前記頭部先端部の両端から周方向かつ軸方向へ斜行して前記一対のスロット導体部に個別に連なる一対の頭部斜行部とからなり、

前記飛び出し端部は、前記一対のスロットから周方向かつ軸方向へ斜行する一対の端部斜行部と、前記端部斜行部の先端に形成されて異なる前記セグメントの前記端部斜行部の先端に接合される端部先端部とからなり、

前記頭部側コイルエンドは、周方向へみた場合に径方向へ順次配置された複数の前記頭部を有し、

前記端部側コイルエンドは、周方向へみた場合に径方向へ順次配置された複数の前記端部を有する、

回転電機のセグメント順次接合ステータコイルにおいて、

径方向に隣接する一対の前記導体収容位置に挿入される前記セグメントである小回りセグメントと、前記一対の導体収容位置の両側に個別に隣接する一対の前記導体収容位置に挿入される前記セグメントである大回りセグメントとを含み、

前記大回りセグメントの前記端部先端部は、この大回りセグメントの前記端部先端部に径方向に隣接する前記小回りセグメントの前記端部先端部に接合され、

前記大回りセグメント又は前記小回りセグメントの前記端部斜行部は、径方向

に隣接する前記大回りセグメントの前記端部斜行部と前記小回りセグメントの前記端部斜行部との交差部位にて前記大回りセグメントと前記小回りセグメントとの間の径方向隙間を拡大する向きに曲げられた曲部を有することを特徴とする回転電機のセグメント順次接合ステータコイル。

【請求項2】

請求項1記載の回転電機のセグメント順次接合ステータコイルにおいて、前記大回りセグメントおよび前記小回りセグメントからなるセグメントセットを径方向に複数有し、

径方向に隣接する一対の前記セグメントセットの間の隙間及び径方向に隣接する一対の前記小回りセグメントの間の隙間は、前記ステータコアの端面近傍よりも前記端部先端部において広くされていることを特徴とする回転電機のセグメント順次接合ステータコイル。

【請求項3】

請求項2記載の回転電機のセグメント順次接合ステータコイルにおいて、径方向に隣接する一対の前記導体収容位置に個別に収容される一対の前記スロット導体部に連なる小回り頭部を有する前記セグメントである小回りセグメントと、前記小回り頭部を径方向へ囲む大回り頭部を有する前記セグメントである大回りセグメントとにより構成されるセグメントセットを、径方向へ多数セット有し、

径方向方向等しい位置を有して周方向に配列される多数の前記セグメントセットは、所定の相電圧が印加される部分相コイルを形成し、

前記相コイルは、それぞれ径方向に異なる位置をもつ多数の前記部分相コイルを、径方向に隣接する前記部分相コイル同士の順次接続により直列接続して構成されることを特徴とする回転電機のセグメント順次接合ステータコイル。

【請求項4】

請求項3記載の回転電機のセグメント順次接合ステータコイルにおいて、同じ相電圧が印加されるスロット導体部をそれぞれ収容するとともに互いに周方向に連続して隣接する多数の前記スロットにより構成される同相スロット群を有し、

共通の前記スロットに収容されてそれぞれ径方向に異なる位置をもつ多数の前記部分相コイルを径方向に隣接する前記部分相コイル同士の順次接続により直列接続してそれぞれ構成され、同相スロット群の互いに異なるスロットに収容される多数の前記直列相コイル回路を有し、

前記相コイルは、前記多数の直列相コイル回路を並列接続して構成されることを特徴とする回転電機のセグメント順次接合ステータコイル。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、回転電機のセグメント順次接合型ステータコイルおよびその製造方法に関する。

【0002】

【従来の技術】

従来、ステータコアのスロットに挿通された多数のセグメント導体を順次接合して形成されたセグメント順次接合型ステータコイルが提案されている。たとえば、特許第3118837号は、略U字形状を有する導体片であるセグメントを順次接合して形成されたセグメント順次接合型コイルの製造について開示している。

【0003】

更に説明すると、このセグメント順次接合型ステータコイルは、セグメントの一対の脚部を回転子の略磁極ピッチだけ互いに離れた一対のスロットに個別に挿通して飛び出した両端部を周方向へ曲げ、各セグメントの両脚部の先端を順次接合して形成されている。

【0004】

つまり、このセグメントは、略U字状（より正確には略V字状）の頭部（曲がり部又はターン部とも呼ばれる）と、この頭部の両端からコアの互いに異なる二つのスロットにコアの軸方向一側から個別に挿入された一対のスロット導体部と、両スロット導体部の先端からコアの軸方向他側へ飛び出して周方向へ延在する一対の飛び出し端部とをそれぞれ有し、各飛び出し端部の先端部は、一対づつ接

合されている。なお、この明細書では、スロット導体部と飛び出し端部とをまとめてセグメントの脚部と呼称する場合もあるものとする。したがって、各セグメントの頭部はステータコイルの頭部側コイルエンド) を構成し、各セグメントの飛び出し端部はステータコイルの端部側コイルエンドを構成する。

【0005】

また、特許第3118837号は、小回りセグメントと、この小回りセグメントを囲む大回りセグメントとにより構成されたセグメントセットの合計4本の脚部を互いに同軸配置された2つのリングに個別に保持し、これらリングを相対回動させて、各セグメントの一対の脚部を周方向へ展開して頭部斜行部を形成することを開示している。

【0006】

また、特開2000-139049は、ステータコアのスロットにそれぞれ収容された小回りセグメントと、この小回りセグメントを囲む大回りセグメントとにより構成されたセグメントセットの合計4本の脚部を互いに同軸配置された4つのリングに個別に保持し、これらリングを相対回動させて、各セグメントの一対の脚部を周方向へ展開して端部斜行部を形成することを開示している。

【0007】

更に、特許第310470号は、径方向に隣接する端部先端部のペアを溶接すること、周方向に隣接する2つの端部先端部の間に拘束部材を介在させて端部先端部のペアの姿勢を確保することを開示している。

【0008】

特開2000-166148号公報は、端部側コイルエンドの端部先端部近傍において大回りセグメントの端部斜行部と小回りセグメントの端部斜行部との互いに対面する側面に凹部を設けることにより、径方向に隣接する他の端部斜行部との交差部分におけるこの端部斜行部の径方向厚さを低減することを開示している(図13参照)。

【0009】

上記公報などに開示されているこのセグメント順次接合型ステータコイルの製造方法例について、以下に説明する。

【0010】

まず、必要本数の松葉状セグメントを準備する。次に、松葉状セグメントをU字状セグメントに加工してセグメントの一対のスロット導体部を周方向へ互いに略磁極ピッチ離れさせるとともに必要数のセグメントをコアの各スロットに同時挿通できるようにそれらを空間配置（周方向へ整列）させる工程が行われる。この工程は、たとえば上記特許3118837号の第3図に示される同軸の複数の穴付きのリングを用い、これら穴付きのリングの周方向同位置の各穴に松葉状セグメントの両脚部を個別に挿入し、各リングを略磁極ピッチ相対回転して、この松葉状セグメントを頭部が周方向へU字状（V字状と考えても良い）に開いたU字状セグメントに加工することにより行われる。この工程は、通常、小回りセグメントと大回りセグメントとからなるセグメントセットに対して実施される。

【0011】

次に、U字状に形成され、周方向に整列された各セグメントをコアの各スロットに挿入される工程が行われる。この工程は、U字状に変形され、周方向に整列された各セグメントの頭部を保持しつつ脚部を上記一対の穴付きリングから抜き出し、コアの各スロットに挿入することにより行なわれる。

【0012】

次に、スロットから飛び出した各飛び出し端部を周方向へ屈曲する工程が行われる。好適には、各飛び出し端部は半磁極ピッチだけ周方向へ屈曲される。このような周方向屈曲は、たとえば上記特許3196738号の第4図、第5図に示される同軸の複数の穴付きリングを用い、各穴付きリングの各穴に各飛び出し端部の先端を挿入し、各穴付きリングをそれぞれ周方向へ半磁極ピッチ（電気角 $\pi/2$ ）回動して、各飛び出し端部をそれぞれ周方向へ半磁極ピッチ屈曲させればよい。なお、各穴付きリングを回動させる際、各穴付きリングを飛び出し端部に向けて軸方向に付勢しながら行うと、屈曲点の曲率半径を大きくできるので好適である。次に、各飛び出し端部の先端部を所定の順序で溶接する工程が行われる。

【0013】

これにより各相のコイルを意味する相コイルがエンドレスに形成されるので、

適切な部位でU字状セグメントのU字状の頭部を切断することにより、頭部側にて各相コイルの引き出し端子を形成することができる。これら引き出し端子をあらかじめ長く形成しておけば、この長く形成した部分を周方向へ屈曲することにより、中性点用の渡り線などとして用いることができる。なお、これらの引き出し端子を頭部側コイルエンドに設けるのは、端部側コイルエンドでは、溶接工程があるため、長い引き出し端子が邪魔になるからである。

【0014】

上記説明したセグメント順次接合ステータコイルは、従来、車両用交流発電機のステータコイルとして用いられていた。

【0015】

【発明が解決しようとする課題】

しかしながら、上記公報などにより開示されているセグメント順次接合型ステータコイルでは、次の問題があった。

【0016】

すなわち、特開2000-166148号公報に開示される凹部付き端部斜行部（図13参照）は、プレス成形にて上記凹部の径方向厚さを低減するが、このプレス成形により導体断面積減少によるコイル抵抗増大を回避し、かつ、周方向幅の増大による周方向に隣接する端部斜行部との干渉を防ぐために、端部斜行部をこの凹部がない部分にて角部を相当に面取りした形状とし、凹部がある部分にて上記プレス成形により角部がほとんど面取りされていない形状とするように断面角形化している。

【0017】

しかしながら、このような断面角形率（面取り率の逆数）の増大により上記凹部によって端部斜行部の径方向厚さ減少による断面積減少を補償するためには、元の断面角形率を小さくし、プレス成形後の断面角形率をほとんど面取りがない程度にまで増大する必要があり、その結果として絶縁皮膜に掛かるストレスが非常に大きくなる。

【0018】

また、スロットに挿入されるスロット導体部の断面角形率（実際の断面積／等

しい幅、高さの長方形の断面積)が低下してスロット占積率の低下を招いてしまうという問題もあった。更に、元のセグメントの断面角形率が大きい場合には実施が困難であった。

【0019】

特に、このような断面角形率の変更による端部斜行部の径方向厚さの片面側からの減少をプレス成形により実施するには、端部斜行部を周方向に挾圧して端部斜行部が周方向や軸方向に伸びるのを防止する必要があるが、このような強い挾圧は絶縁皮膜を損傷しやすい。

【0020】

本発明は上記問題点に鑑みなされたものであり、絶縁皮膜に掛かるストレスの増大によるセグメントの電気絶縁性を抑止しつつ、端部斜行部間の電気絶縁性を確保することをその目的としている。

【0021】

【課題を解決するための手段】

請求項1記載の本発明は、径方向へ順番に並んだ偶数個の導体収容位置を有するステータコアのスロットに収容され、順次接続されてM (Mは3以上の整数)相電機子コイルの相コイルの1ターンを構成する多数のセグメントを有し、前記セグメントは、互いに所定ピッチ離れた一対の前記スロットの互いに異なる導体収容位置に個別に収容される一対のスロット導体部と、前記両スロット導体部から前記ステータコアの一端側へ突出して頭部側コイルエンドを構成する頭部と、前記両スロット導体部から前記ステータコアの他端側へ突出して端部側コイルエンドを構成する一対の飛び出し端部とを有し、前記頭部は、略U字状の頭部先端部と、前記頭部先端部の両端から周方向かつ軸方向へ斜行して前記一対のスロット導体部に個別に連なる一対の頭部斜行部とからなり、前記飛び出し端部は、前記一対のスロットから周方向かつ軸方向へ斜行する一対の端部斜行部と、前記端部斜行部の先端に形成されて異なる前記セグメントの前記端部斜行部の先端に接合される端部先端部とからなり、前記頭部側コイルエンドは、周方向へみた場合に径方向へ順次配置された複数の前記頭部を有し、前記端部側コイルエンドは、周方向へみた場合に径方向へ順次配置された複数の前記端部を有する回転電機の

セグメント順次接合ステータコイルにおいて、

径方向に隣接する一対の前記導体収容位置に挿入される前記セグメントである小回りセグメントと、前記一対の導体収容位置の両側に個別に隣接する一対の前記導体収容位置に挿入される前記セグメントである大回りセグメントとを含み、前記大回りセグメントの前記端部先端部は、この大回りセグメントの前記端部先端部に径方向に隣接する前記小回りセグメントの前記端部先端部に接合され、前記大回りセグメント又は前記小回りセグメントの前記端部斜行部は、径方向に隣接する前記大回りセグメントの前記端部斜行部と前記小回りセグメントの前記端部斜行部との交差部位にて前記大回りセグメントと前記小回りセグメントとの間の径方向隙間を拡大する向きに曲げられた曲部を有することを特徴としている。

【0022】

すなわち、この発明によれば、上記断面角形率の増大により端部斜行部の一側面に凹部を形成する代わりに、大回りセグメント又は小回りセグメントの端部先端部近傍の端部斜行部を径方向に曲げて同様の凹部を形成する。本発明の凹部形成方法によれば、上記従来の断面角形率の増大法と同じく、セグメント断面積を確保できるとともに、端部先端部のペアを溶接により大回りセグメントの端部斜行部の絶縁皮膜が軟化したり変形したりしても、この絶縁皮膜が、この大回りセグメントの端部斜行部と交差する他の小回りセグメントの端部斜行部の絶縁皮膜と接触するのを防止できるので、これら交差する両端部斜行部間の電気絶縁性の低下を良好に防止することができる。

【0023】

更に、本発明の凹部形成方法によれば、上記従来の断面角形率の増大法のように、端部斜行部を周方向に挾圧しつつ径方向に変形させるという困難な成形技術を必要とせず、その上、端部斜行部の断面角部にて絶縁皮膜の強いストレスが生じるという問題を回避できるため、絶縁皮膜の劣化による電気絶縁性の低下を格段に抑止することができ、車両走行モータのごとき高電圧用モータへの採用において特に好適となる。

【0024】

請求項2記載の構成は請求項1記載の構成において更に、前記大回りセグメン

トおよび前記小回りセグメントからなるセグメントセットを径方向に複数有し、径方向に隣接する一対の前記セグメントセットの間の隙間及び径方向に隣接する一対の前記小回りセグメントの間の隙間は、前記ステータコアの端面近傍よりも前記端部先端部において広くされていることを特徴としている。

【0025】

請求項1記載の構成の問題点は、上記曲げにより曲部が径方向反対側へ突出し、その結果、隣りのセグメントセットの大回りセグメントの曲部などと接触するのを回避するために、セグメントセット間に径方向隙間を確保しなければならないことである。このようなセグメントセット間の径方向隙間の確保は、スロット占積率の低下を招く。

【0026】

そこで、この構成では、端部斜行部をたとえばスロット端面から径方向へ斜めに又は湾曲又は屈曲して延在させることにより、端部先端部近傍における曲部の径方向への突出を可能としているので、スロット占積率が低下し、ステータコアが大型するのを防止することができる。

【0027】

好適な製造方法において、ステータコアのスロットに挿入されたセグメントセットの角端部斜行部を全周にわたって径方向外側に一齊に倒すことにより一挙に端部斜行部を径方向外側へ傾斜させることにより、径方向に隣接する2つのセグメントセット間の端部先端部間の径方向隙間をステータコア近傍のそれに比較して簡単に増加することができる。もちろん、端部斜行部の径方向外側への倒し角自体は、セグメントセットの径方向位置により当然変更するべきであり、径方向外側の端部斜行部ほど大きな倒し角度が与えられるべきである。

【0028】

請求項3記載の構成は請求項2記載の構成において更に、径方向に隣接する一対の前記導体収容位置に個別に収容される一対の前記スロット導体部に連なる小回り頭部を有する前記セグメントである小回りセグメントと、前記小回り頭部を径方向へ囲む大回り頭部を有する前記セグメントである大回りセグメントとにより構成されるセグメントセットを、径方向へ多数セット有し、径方向方向等しい

位置を有して周方向に配列される多数の前記セグメントセットは、所定の相電圧が印加される部分相コイルを形成し、前記相コイルは、径方向に異なる前記セグメントセットにより別々に形成された多数の前記部分相コイルを、径方向に隣接する前記部分相コイル同士の順次接続により直列接続して構成されることを特徴としている。

【0029】

従来、セグメント順次接合ステータコイルを用いる回転電機の用途としては車両用交流発電機が考えられていたが、更に大出力の車両の走行モータとして採用することが期待される。走行モータは配線、ステータコイルの抵抗損失低減のために従来より格段に高いバッテリ電圧（数百V）により給電される必要がある。しかし、両者の回転数にはほとんど相違がないため、走行モータ用のセグメント順次接合ステータコイルは車両交流発電機用のセグメント順次接合ステータコイルに比較して格段の多ターン化が要求されることになる。

【0030】

ターン数の増大には、図14に示すようにセグメント33（a～e）を多重相互囲み配置すること（図14では5重）によりスロットS内の径方向導体数を増加することが考えられるが、この多重相互囲みセグメント方式によれば、囲み数に等しい種類のセグメントが必要となること、外側のセグメント33eの頭部の配線距離が長くなるために配線抵抗が増大してしまうという問題があった。

【0031】

特に、このU字状のセグメントの頭部先端部Hの径方向幅は製造上の理由によりその脚部L対の径方向幅よりも大きくなるため、図14では省略したが、実際には図14によれば頭部側コイルエンド311の径方向幅Wが相当に大きくなり、頭部側コイルエンド311の軸方向長も増大して、モータ軸長が増大し、その体格重量も増大してしまうという問題もあった。

【0032】

更に、上記したようにセグメントの頭部の径方向幅がその脚部対の径方向幅よりも大きくなるために、展開時の擦れ合いを防止するために径方向に隣接する異なるセグメントの脚部H、H間に隙間dを確保しなければならず、その分だけスロ

ット占積率が低下してしまうという問題があった。

【0033】

また更に、上記多重の囲みにより内部のセグメント33aは放熱が悪くなるという問題もあった。

【0034】

このような問題に対し、この構成では、図3に示すように、スロット内の径方向へ連続する4つの導体収容位置を占めるセグメントセットを径方向に積み重ね、周方向に配列される所定のセグメントセットを直列接続して部分相コイルを構成し、それぞれ異なる径方向位置のセグメントセットにより構成されて互いに径方向に隣接する各部分相コイルを径方向に順次接続して相コイルを形成する構成を採用した。

【0035】

この構成によれば、径方向に隣接する各部分相コイルの接続を異形のU字状のセグメントを用いることにより簡単に実施することができ、その上、径方向に異なるセグメントセット（部分相コイル）間の温度や配線長さのばらつきにより電流分布が局部的に集中して局部的に過熱が生じることもなく、容易に多ターン化を実現することができる。

【0036】

請求項4記載の構成は請求項3記載の構成において更に、同じ相電圧が印加されるスロット導体部をそれぞれ収容するとともに互いに周方向に連続して隣接する多数の前記スロットにより構成される同相スロット群を有し、共通の前記スロットに収容されてそれぞれ径方向に異なる位置をもつ多数の前記部分相コイルを径方向に隣接する前記部分相コイル同士の順次接続により直列接続してそれぞれ構成されて同相スロット群の互いに異なるスロットに収容される多数の前記直列相コイル回路を有し、前記相コイルは、前記多数の直列相コイル回路を並列接続して構成されることを特徴としている。

【0037】

従来、セグメント順次接合ステータコイルを用いる回転電機の用途としては車両用交流発電機が考えられていたが、更に大出力の車両の走行モータとして採用

することが期待される。このような大出力化には、大電流が必要であり、大電流化のためのセグメント断面積の増大には限界があるため、部分相コイルを並列に接続して相コイルの合計断面積を増大する必要があるが、このような並列接続は渡り線の追加などを必要とするためセグメント順次接続により構成することが容易ではなかった。

【0038】

そこで、この構成では、請求項3記載の相コイルを直列相コイル回路とし、この直列相コイル回路を複数設け、各直列相コイル回路を同相スロット群の互いに異なるスロットに収容する構成を採用した。本構成によれば、各直列相コイル回路間の配線抵抗のばらつきをなくすことができ、また、各部分相コイル間の電流ばらつきを良好に低減することができる。特に、径方向異なる位置の部分相コイル間の抵抗ばらつきがあったとしても、上記各直列相コイル回路間の抵抗ばらつきが生じないという利点は重要な利点である。

【0039】

したがって、この構成によれば、多種類のセグメントを用いたり、コイルエンドにて複雑な特別の渡り線を追加したりすることなく、コイルの多ターン化を実現することができ、高電圧を必要とする自動車用走行モータのステータコイルを実現することができる。

【0040】

【発明の実施の形態】

以下、この発明のセグメント順次接合型ステータコイルを有する高電圧車両用回転電機の例を図に示す各実施形態に基づいて説明する。図1は車両の走行動力発生用の走行モータとして使用されるこの回転電機の軸方向断面図である。ただし、ステータコイルのコイルエンド部分は模式図示されている。図2はステータコイルの一部をなすセグメントの斜視図、図3はスロット内におけるセグメントの収容状態を示す部分断面図である。

(全体構成の説明)

図1において、走行モータは、ステータコア1、ロータ2、ステータコイル3、ハウジング4、回転軸7を有している。ステータコア1は、ハウジング4の周

壁内周面に固定され、ステータコイル3はステータコア1の各スロットに巻装されている。ロータ2は、ハウジング4に回転自在に支持された回転軸7に固定されたIPM型ロータであり、ステータコア1の径内側に配置されている。ステータコイル3は三相電機子巻線であって、外部の約300Vのバッテリから給電される三相インバータから給電されている。

【0041】

この走行モータは、二次電池車又は燃料電池車又はハイブリッド車の走行動力を発生する永久磁石型三相ブラシレスDCモータ（同期モータ）であるが、ロータ構造としては、公知の種々の形式に置換可能である。このような種々の形式の同期機自体は周知であるので説明を省略する。

（ステータコイル3の説明）

ステータコイル3は、図2に示す所定数のセグメント（本発明で言うセグメントセット）33をステータコア1の一側からステータコア1の各スロットに挿通し、スロットから各セグメント33の飛び出し端部をステータコア1の他側に必要長さだけ突出させ、各セグメント33の飛び出し端部を周方向に略電気角 $\pi/2$ だけそれぞれ捻り、各セグメント33の飛び出し端部の先端部（接合部）を所定の組み合わせで溶接して構成されている。セグメント33は、溶接部分すなわち上記飛び出し端部の先端部（端部先端部ともいう）を除いて樹脂皮膜で被覆された長板U字形状を有している。この種のセグメント順次接合型のステータコイル自体は、上述したようにもはや公知となっている。

【0042】

セグメント（セグメントセット）33の詳細を更に詳しく説明する。

【0043】

一つのセグメント（セグメントセット）33は、略V字状の頭部と、この頭部の両端から直線的に伸びてスロットに収容されている一対のスロット導体部と、両スロット導体部の先端からそれぞれ伸びる一対の飛び出し端部とをそれぞれ有する一つの大セグメント331と一つの小セグメント332とからなる。これにより、ステータコイル3は、ステータコア1の一側に全体としてリング状に存在する第一のコイルエンド部（頭部側コイルエンド）311と、ステータコア1の

他側に全体としてリング状に存在する第二のコイルエンド（端部側コイルエンド）部312と、スロット内に存在するスロット導体部とに区分される。

【0044】

つまり、図1において、頭部側コイルエンド311は各セグメント33の上記頭部により構成され、端部側コイルエンド312は各セグメント33の上記飛び出し端部により構成されている。

【0045】

図1において、4セットのセグメントセット33が径方向へ順番に挿通されている。3301は最も径方向内側のセグメントセット群S1の一つのセグメント33の頭部、3302は径方向内側から数えて2番目のセグメントセット群S2の一つのセグメント33の頭部、3303は径方向内側から数えて3番目のセグメントセット群S3の一つのセグメント33の頭部、3302は最も径方向外側のセグメントセット群S3の一つのセグメント33の頭部であり、径方向へ順番に4個並んだ頭部は、前述した頭部側コイルエンド311を構成している。ただし、図1では、図示簡単化のために端部側コイルエンド312は2つのセグメントセット群の径方向へ並んだ合計8本（4対）の飛び出し端部しか図示していない。

（セグメント33の説明）

セグメント（セグメントセット）33を図2を参照して説明する。

【0046】

セグメント（セグメントセット）33は、大きい大セグメント（大回りセグメントともいう）331と、小さい小セグメント（小回りセグメントともいう）332とを有している。この大セグメント331とこの大セグメント331が囲む小セグメント332とをセグメントセットと称する。

【0047】

大セグメント331において、331a、331bはスロット導体部、331cは頭部、331f、331gは飛び出し端部である。飛び出し端部331f、331gの先端部331d、331eは接合部分であるので端部先端部又は接合部とも称する。スロット導体部331aを最内層のスロット導体部と称し、スロット導体部331bを最外層のスロット導体部と称する。

【0048】

小セグメント332において、332a、332bはスロット導体部、332cは頭部、332f、332gは飛び出し端部である。飛び出し端部332f、332gの先端部332d、332eは接合部分であるので端部先端部又は接合部とも称する。スロット導体部332aを中内層のスロット導体部と称し、スロット導体部332bを中外層のスロット導体部と称する。

【0049】

符号'は、図示しない大セグメント又は小セグメントの符号'がない部分と同じ部分を示す。したがって、図2では、互いに径方向に隣接する接合部331dと接合部332d'が溶接され、互いに径方向に隣接する接合部332dと接合部331d'が溶接され、互いに径方向に隣接する接合部332eと接合部331e'が溶接されている。

【0050】

図2では、最内層のスロット導体部331aと中内層のスロット導体部332aが、ロータコア71の所定のスロットに収容される場合、同一のセグメント331、332の最外層のスロット導体部331bと中外層のスロット導体部332bはこの所定のスロットから略所定奇数磁極ピッチT（たとえば1磁極ピッチ（電気角度 π ））離れたスロットに収容される。小セグメント332の頭部332cは大セグメント331の頭部331cに囲まれるようにして配置されている。

（スロット内のセグメントセット配置）

スロットのセグメントセットの配置状態を図3に示す。

【0051】

35はスロットである。スロット35には径方向へ16個の導体収容位置P1～P16が設定され、各導体収容位置P1～P16にはそれぞれ1個のスロット導体部が収容されている。各スロット35は、4セットのセグメントセット群S1～S4が径方向へ順番に収容し、導体収容位置P1～P4はセグメントセット群S1を、導体収容位置P4～P8はセグメントセット群S2を、導体収容位置P9～P12はセグメントセット群S3を、導体収容位置P13～P16はセグメントセ

ト群S4を収容している。各セグメントセット群S1～S4はそれぞれ周方向へ配列された多数のセグメント33からなる。

【0052】

この最も内側のセグメントセット群S1を一例として詳しく説明すると、最内層のスロット導体部331aはステータコア32のスロット35の径方向最内側に配置され、以下、径方向外側へ順に、中内層のスロット導体部332a、中外層のスロット導体部332b'、最外層のスロット導体部331b'の順に配置され、結局、各スロット35は4本のスロット導体部を4層1列に収容する。図3において、スロット導体部332b'、332b'は、スロット導体部332a、331aをもつ大セグメント331、小セグメント332とは異なる大セグメント331、小セグメント332に属している。他のセグメントセットS2～S4も上記と同様の配置、構成を持つことは言うまでもない。大セグメント331と小セグメント332とからなるセグメント（セグメントセット）33をスロット35に挿通する状態を図4に示す。

（三相ステータコイルの構成の説明）

径方向に4セット配列されたセグメントセット群S1～S4による三相ステータコイルの接続を図9を参照して以下に説明する。図9はU相の相コイルを示す。

【0053】

1磁極ピッチ当たり9スロット（同相3スロット、3相）、極数12、スロット数108とされる。隣接3スロットは、同相の相電圧が印加される同相スロット群を構成している。1スロットには上記したように16個の導体収容位置P1～P16が径方向に形成され、各導体収容位置には1つのスロット導体部が収容される。

【0054】

各スロットの径方向最内側から数えて1～4番目の4つの導体収容位置P1～P4に収容されるセグメントセット群S1は、波巻きなどにより接続されて第1の部分相コイルを各相当たり3個形成する。図9に示すU11、U21、U31はこの第1の部分相コイルである。部分相コイルU11、U12、U13は、隣接する同相スロット群を構成する3つスロットのうち互いに異なるスロットに収

容される。

【0055】

各スロットの径方向最内側から数えて5～8番目の4つの導体収容位置P5～P8に収容されるセグメントセット群S2は、波巻きなどにより接続されて第2の部分相コイルを各相当たり3個形成する。図9に示すU12、U22、U32はこの第2の部分相コイルである。部分相コイルU12、U22、U32は、隣接する同相スロット群を構成する3つスロットのうち互いに異なるスロットに収容される。

【0056】

各スロットの径方向最内側から数えて9～12番目の4つの導体収容位置P9～P12に収容されるセグメントセット群S3は、波巻きなどにより接続されて第3の部分相コイルを各相当たり3個形成する。図9に示すU13、U23、U33はこの第3の部分相コイルである。部分相コイルU13、U23、U33は、隣接する同相スロット群を構成する3つスロットのうち互いに異なるスロットに収容される。

【0057】

各スロットの径方向最内側から数えて13～16番目の4つの導体収容位置P13～P16に収容されるセグメントセット群S4は、波巻きなどにより接続されて第4部分相コイルを各相当たり3個形成する。図9に示すU14、U24、U34はこの第3の部分相コイルである。部分相コイルU14、U24、U34は、隣接する同相スロット群を構成する3つスロットのうち互いに異なるスロットに収容される。

【0058】

また、部分相コイルU11、U12、U13、U14は、同相スロット群をなす隣接3スロットのうちの周方向一方側から数えて最初のスロットに収容され、部分相コイルU21、U22、U23、U24は、同相スロット群をなす隣接3スロットのうちの周方向一方側から数えて中央のスロットに収容され、部分相コイルU31、U32、U33、U34は、同相スロット群をなす隣接3スロットのうちの周方向一方側から数えて最後のスロットに収容される。

【0059】

部分相コイルU11、U12、U13、U14は、隣接する部分相コイル同士が順番に接続されて直列相コイル回路U1を形成し、部分相コイルU21、U22、U23、U24は、隣接する部分相コイル同士が順番に接続されて直列相コイル回路U2を形成し、部分相コイルU31、U32、U33、U34は、隣接する部分相コイル同士が順番に接続されて直列相コイル回路U3を形成する。これらの径方向に隣接する部分相コイル同士の接続は、従来より公知であるように径方向に隣接する2つの部分相コイルの空きの導体収容位置の一つ同士に異形のU字状セグメントを挿入して接続される。

【0060】

たとえば、部分相コイルU12は、通常のセグメント（好ましくは大回りセグメント）を一つ抜くことによりできた一対の空きの導体収容位置の一つと、同様に部分相コイルU13に形成された空きの導体収容位置の一つとにこの異形のU字状のセグメントを挿入して、部分相コイルU12、U13を接続することができる。

【0061】

また、部分相コイルU12の残りの一つの空きの導体収容位置と、同様に部分相コイルU11に形成された空きの導体収容位置の一つとにこの異形のU字状のセグメントを挿入して、部分相コイルU12、U13を接続することができる。

【0062】

部分相コイルU11の残る一つの空きの導体収容位置には中性点用（引き出し端子用でも良い）の異形セグメントが挿入され、同様に、部分相コイルU14の残る一つの空きの導体収容位置には引き出し端子用（中性点用でも良い）の異形セグメントが挿入される。

【0063】

直列相コイル回路U1、U2、U3は、両端同士が接続されて並列接続され、U相の相コイルを形成する。

【0064】

以下、通常のセグメント順次接合ステータコイルの標準製造プロセスをまず最

初に説明し、その後、この実施例特有の製造工程を説明する。

(標準の頭部捻り工程)

まず、必要本数の小セグメント332と大セグメント331との展開前の形状をもつ2種類の松葉状セグメントを準備する。これらの松葉状セグメントの両脚部は、互いに略隣接して直線状に延在しており、その頭部は鋭く屈曲している。次に、松葉状セグメントをU字状セグメントに加工してセグメントの一対のスロット導体部を周方向へ互いに略磁極ピッチ離れさせるとともに必要数のセグメントをステータコアの各スロットに同時挿通できるようにそれらを空間配置（周方向へ整列）させる工程が次のように行われる。

【0065】

この頭部捻り工程を図5、図6を参照して以下に説明する。

【0066】

この頭部捻り工程におけるセグメント挿入前の状態を図5に示す。図5において、10は頭部捻り装置、11は小リング、12は大リングであり、両者は相対回転可能に同軸配置されている。大リング11にはそれぞれ径方向へ並んだ一対の孔121、122が周方向所定ピッチで設けられ、小リング12には孔121、122と周方向等ピッチで径方向へ並んだ一対の孔111、112が設けられている。孔111～114は径方向へ一列に並んでいる。大回りセグメント（大セグメント）331の両スロット導体部を、最も内側の孔111と最も外側の孔122に挿入し、小回りセグメント（小セグメント）332の両スロット導体部は、最も内側の孔111の外側の孔112と、最も外側の孔122の内側の孔121とに挿入する。

【0067】

図6は、すべての大セグメント331とすべての小セグメント332とを小リング11と大リング12との孔111、112、121、122に嵌挿した状態を示す。図6において、16は小リング11と大リング12の軸方向上方に配置された頭部押さえプレートである。頭部押さえプレート16の下端面には、同一周方向位置の大セグメント331の頭部の頂部と小セグメント332の頭部の頂部とのペアを、周方向両側から挟む一対の爪部（一つのみ図示）160を有して

いる。すなわち、各セグメント33を孔111、112、121、122に挿入した後、押さえプレート16が降下して、各対の爪部160が、周方向同位置の大セグメント331の頭部の頂部と小セグメント332の頭部の頂部とを周方向両側から挟む。

【0068】

その後、大リング12及び小リング11とを、静止するこの頭部押さえプレート16に対して半磁極ピッチだけ互いに逆方向に回動される。これにより、すべてのセグメント33の日本の脚部は周方向1磁極ピッチだけ周方向に展開される。

【0069】

リング11、12の回動時に、セグメント33の頭部の頂部はリング11、12の回動とともにリング11、12にむけて軸方向に変位するので、頭部押さえプレート16はそれに合わせて軸方向に変位させる。17は、大セグメント331、小セグメント332が深く落下しないように規制する規制プレートである。規制プレート17を、径方向外側の2つの脚部が載置される外側規制プレートと、径方向内側の2つの脚部が載置される内側規制プレートとに分割し、この内側規制プレートをリング11に固定してリング11と一体に回動させ、この外側規制プレートをリング12に固定してリング12と一体に回動させてもよい。

【0070】

次に、頭部押さえプレート16により各セグメント33を保持したまま、小リング11と大リング12とを各セグメント33から離脱させる。

(標準の端部挿入工程)

次に、小回り状のU字状セグメント332を上記両穴付きリングから抜き出して、図4に一部示すようにステータコア1のスロット35の中内層位置及び中外層位置に挿通し、大回り状のU字状セグメント331を上記両穴付きリングから抜き出して、ステータコア1のスロット35の最内層位置及び最外層位置に挿通する。この時、上記頭部押さえプレート16で各セグメントがばらけないように保持することにより、各セグメントを一挙に各スロット35に挿通することができる。その後、この頭部押さえプレート16は取り外される。

【0071】

なお、上記した小回り状のU字状セグメント332、大回り状のU字状セグメント331のステータコアのスロット35へ挿通するまでの工程は上記に限られるものではなく、上記した他に種々採用することができる。

(標準の端部捻り工程)

上記のようにスロットに挿通されたセグメント33の端部の捻り成形工程を以下に説明する。

【0072】

この実施例では、大セグメント331の最外層スロット導体部331bに連なる端部331g(外層側端部ともいう)は周方向一方側に捻られ、大セグメント331の最内層スロット導体部331aに連なる端部331f(内層側端部ともいう)は周方向他方側に捻られている。小セグメント332の中内層のスロット導体部332aに連なる端部332f(内層側端部ともいう)は周方向一方側に捻られ、小セグメント332の中外層のスロット導体部332bに連なる端部332g(外層側端部ともいう)は周方向他方側に捻られている。導体部331fと332fとの周方向捻り量の合計は1磁極ピッチとされ、導体部331gと332gとの周方向捻り量の合計は1磁極ピッチとされている。

【0073】

上記した大セグメント331および小セグメント332からなるセグメントセットの捻り加工を図7、図8を参照して更に詳しく説明する。図7はステータコイル捻り装置500の模式縦断面図、図8は図7におけるA-A断面矢視図である。

【0074】

まず、ステータコイル捻り装置500の構成を説明する。

【0075】

ステータコイル捻り装置500は、ステータコア1の外周部を受けるワーク受け51、ステータコア32の径方向の動きを規制して保持するクランバ52、ステータコア32の浮き上がりを防止するワーク押さえ53、ステータコア32の一端から出たセグメント33の飛び出し脚部を捻るための捻り整形部54、捻り



整形部54を軸方向に駆動するための昇降用シャフト54a、捻り整形部54を周方向に回転駆動する回転駆動機構541a～544a、昇降用シャフト54aを軸方向に移動するための昇降駆動機構54b、及び、回転駆動機構541a～544aと昇降駆動機構54bとを制御するコントローラ55を備えている。

【0076】

捻り整形部54は、同心状に配置された4つの円筒状の捻り治具541～544がそれらの先端面を揃えて配置されている。各捻り治具541～544は回転駆動機構541a～544aにより独立に回転可能とされ、かつ、昇降駆動機構54bにより昇降用シャフト54aを昇降することにより同時に昇降可能となっている。

【0077】

図8に示されているように、捻り治具541～544の先端面には、挿入されたセグメント33の端部331f、331g、332f、332gの各先端（接合部）を保持するセグメント挿入部541b～544bが穿設されている。このセグメント挿入部541b～544bは、ステータコア1のスロット35の総数に等しい数だけ各捻り治具541～544の周方向に並べて形成されている。

【0078】

セグメント挿入部541b～544bは、図8に示すように、互いに径方向に隣接するセグメント挿入部541b～544b同士の連通を防止するための隔壁541c～544c、542d、543dが設けられている。隔壁541c～544c、542d、543dの厚みは、径方向外側から数えて1層目と2層目との間の隔壁541c、542cで形成される間隔d1及び3層目と4層目との間の隔壁543c、544cで形成される間隔d3よりも、2層目と3層目との間の隔壁542d、543dで形成される間隔d2の方が大きくなるように設定されている。

【0079】

次に、ステータコイル捻り装置500の作動を説明する。

【0080】

スロット35内にセグメント33が配置されたステータコア32をワーク受け

51にセットする。次に、ステータコア32の外周部をクランバ52に固定する。その後、ワーク押さえ53でステータコア32の上部及び大セグメント331の頭部331cを押さえることにより、ステータコア32及びセグメント33の上下方向の動きを規制する。

【0081】

セグメント33が配置されたステータコア32をクランバ52及びワーク受け53により固定した後、昇降用シャフト54aによって捻り整形部54を上昇させ、各捻り治具541～544に形成されたセグメント挿入部541b～544bにセグメント33の端部331f、331g、332f、332gを挿入する。

【0082】

セグメント挿入部541b～544bにはセグメント33の端部331f、331g、332f、332gの先端すなわち後に接合部となる部分だけが挿入可能となっている。セグメント33の端部331f、331g、332f、332gはテーパ状に形成されているため、セグメント挿入部541b～544bにスムーズに挿入されることができる。

【0083】

セグメント33の端部331f、331g、332f、332gを捻り整形部54のセグメント挿入部541b～544bに挿入した後、捻り整形部54は、回転駆動機構541a～544aおよび昇降駆動機構54bにより回動され、昇降される。

【0084】

次に、捻り整形部54の回転について説明する。

【0085】

捻り治具541および治具543を時計回り方向に第一の角度だけ回転させ、捻り治具542および捻り治具544を反時計回り方向に第二の角度だけ回転させる。この時、第一の角度と第二の角度の大きさは等しくなくてもよく、両者の合計が必要なスロットピッチとなればよい。

【0086】

その後、セグメント33の端部331f、331g、332f、332gのうちスロット35の出口からセグメント挿入部541b～544bの入口までの部分の長さを一定に保つように、昇降駆動機構54bおよび回転駆動機構541a～544aを制御しながら捻り整形部54を回転しながら上昇させる。この時、セグメント33の端部331f、331g、332f、332gは円弧状の軌跡を描くように回転しながら上昇することが好ましい。この円弧状の軌跡を描く捻りは、スプリングバックによるセグメント33の変形を防止するため、半磁極ピッチ($T/2$)に相当する角度を所定量超えた角度まで行われることが好ましい。

【0087】

その後、昇降駆動機構54bおよび回転駆動機構541a～544aを上記前工程と逆向きの回転させ、下降させる。このようにして、セグメント33の捻り行程を終了し、捻り整形部54を下降させて捻り治具541～544のセグメント挿入部541b～544bからセグメント33の端部331f、331g、332f、332gを取り外す。セグメント33が外された捻り整形部54は回転駆動機構541a～544aによって回転され、原位置に戻される。最後に、クランバ52及びワーク押さえ53が外され、セグメント33に捻りが加えられたステータが取り出される。

【0088】

結局、この捻り工程は、まずセグメント33の端部を周方向にのみ回転変位させてセグメント33を周方向に倒し、続いてセグメント33の端部を周方向並びに軸方向に変位させてセグメント33を深く傾け、その後、所定の加工量を超えてセグメント33の端部を周方向ならびに軸方向に変位させてセグメント33を過剰に深く傾け、その後でセグメント33の端部を所定の加工量まで戻すことにより行われる。

【0089】

捻り整形部54はステータコア32に対して周方向だけでなく軸方向にも相対移動する。そのため、セグメント33の端部331f、331g、332f、332gのうち、スロット35の出口からセグメント挿入部541b～544bの

入口までの部分、すなわち、端部331f、331g、332f、332gからその端部先端（接合部）331d、331e、332d、332eの長さを差し引いた長さを一定に保つように、セグメント33の端部331f、331g、332f、332gが円弧状の軌跡を描くように捻じることができ、これにより、セグメント33がセグメント挿入部541b～544bから抜け出るのを防止することができる。

【0090】

また、セグメント33の端部先端（接合部）331d、331e、332d、332eのみが、セグメント挿入部541b～544bに挿入されており、また、前述と同様にセグメント33がセグメント挿入部541b～544bから抜け出ることはない。

（標準の溶接工程）

次に行う標準の溶接工程を以下に説明する。この工程は本質的に従来と同じである。

【0091】

上記セグメントの端部の捻りの後、図1、図2に示すように、径方向内側から1層目と2層目の端部先端部（接合部）が溶接され、径方向内側から3層目と4層目の端部先端部（接合部）が溶接されて、ステータコイル31が完成される。溶接には、アーク溶接が用いられる。

（この実施例の特徴をなす松葉状セグメントの説明）

次に、この実施例の特徴をなす未展開セグメントセット1000の形状について以下に説明する。図10は、未展開セグメントセット1000の側面図である。

【0092】

未展開セグメントセット1000は、未展開の大回りセグメント（大回り松葉状セグメント）1100と、未展開の小回りセグメント（小回り松葉状セグメント）1200とからなり、大回りセグメント1100は小回りセグメント1200を囲んでいる。

【0093】

大回りセグメント1100は、湾曲した頭部1101と、直線状の脚部とからなり、この脚部は、頭部斜行部用直線部1102と、スロット導体部1103と、端部斜行部用直線部1104と、端部先端部用直線部1105とからなる。頭部斜行部用直線部1102は展開（捻り）後に頭部斜行部となる部分であり、端部斜行部用直線部1104は展開（捻り）後に端部斜行部となる部分であり、端部先端部用直線部1105は展開（捻り）後に端部先端部となる部分である。頭部1101と頭部斜行部用直線部1102とは、完成後に頭部側コイルエンド311を構成し、端部斜行部用直線部1104と端部先端部用直線部1105とは、完成後に端部側コイルエンド312を構成する。

【0094】

小回りセグメント1100は、湾曲した頭部1201と、直線状の脚部とからなり、この脚部は、頭部斜行部用直線部1202と、スロット導体部1203と、端部斜行部用直線部1204と、端部先端部用直線部1205とからなる。頭部斜行部用直線部1202は展開（捻り）後に頭部斜行部となる部分であり、端部斜行部用直線部1204は展開（捻り）後に端部斜行部となる部分であり、端部先端部用直線部1205は展開（捻り）後に端部先端部となる部分である。頭部1201と頭部斜行部用直線部1202とは、完成後に頭部側コイルエンド311を構成し、端部斜行部用直線部1204と端部先端部用直線部1205とは、完成後に端部側コイルエンド312を構成する。端部先端部用直線部1105、1205は、絶縁皮膜を剥離されて互いに溶接される。

【0095】

この実施態様では、大回りセグメント1100の端部斜行部用直線部1104に端部先端部用直線部1105に近接して、小回りセグメント1200の端部斜行部用直線部1204から離れる向きに屈曲して曲部1500を形成することにより両直線部1104、1204の間に凹部（隙間）dが形成した点をその特徴としている。隙間dの軸方向幅は、展開後に互いに斜めに交差しつつ隣接する端部斜行部用直線部1104と端部先端部用直線部1105との交差部分を含む幅に設定されている。

【0096】

このように形成すれば、端部先端部用直線部1105、1205を溶接する際に、この溶接熱により端部斜行部用直線部1104、1205が上記交差部にて接触、溶融変形して、これら端部斜行部用直線部1104、1205間の電気絶縁が低下するのを防止することができる。

【0097】

なお、この実施態様では、凹部（隙間）dが、端部斜行部用直線部1104と隣接して交差するすべての端部斜行部用直線部1204に面して形成されるが、その代わりに溶接熱の影響が甚大な端部先端部用直線部1105、1205近傍においてのみ形成してもよい。1300、1400は端部斜行部用直線部1104の屈曲部である。

【0098】

このセグメントセット1000を頭部斜行部1102、1202の展開後にステータコア1のスロット35に挿入する場合、少なくとも径方向最も外側又は径方向最も内側のセグメントセット33は、他のセグメントセット33を挿入した後で挿入することが、この端部斜行部用直線部1104の屈曲が引っ掛かるのを防止できる点、及び、スロット35の径方向深さの増大も抑制することができる点で好適である。

【0099】

（変形態様）

変形態様を図11に示す。

【0100】

この変形態様は、展開前の小回りセグメント1200の端部斜行部用直線部1204も大回りセグメント1100から遠ざかる向きに曲げて曲部1600も形成したものであり、このようにすれば、大回りセグメント1100、小回りセグメント1200の曲げ量をそれぞれ半分とすることができ、屈曲部1300、1400にて絶縁皮膜に掛かるストレスを軽減することができる。

【0101】

（変形態様）

変形態様を図12に示す。

【0102】

この変形態様は、図10とは逆に展開前の小回りセグメント1200の端部斜行部用直線部1204だけを大回りセグメント1100から遠ざかる向き曲げてに曲部1600だけ形成したものであり、図10の場合と同様の効果を実現することができる。

【0103】

(変形態様)

変形態様を説明する。

【0104】

この変形態様は、図10において、端部先端部用直線部1105に隣接する屈曲部1300だけを残し、屈曲部1400を省略したものである。最も重要なのは、端部先端部用直線部1105近傍における絶縁皮膜の過熱軟化であり、端部先端部用直線部1105から離れると絶縁皮膜に対する影響が小さくなるので、屈曲部1400を省略しても上記効果を奏すことができる。

【図面の簡単な説明】

【図1】 実施例1の車両用走行モータの縦断面図である。

【図2】 図1のセグメントの模式斜視図である。

【図3】 図1のステータコアの径方向部分断面図である。

【図4】 セグメントセットをスロットに挿通する直前の状態を示す模式斜視図である。

【図5】 セグメントの頭部捻り装置のリングに挿通する状態を示す模式断面図である。

【図6】 頭部捻り装置の模式縦断面図である。

【図7】 端部捻り装置の模式縦断面図である。

【図8】 端部捻り装置のリングの平面図である。

【図9】 ステータコイルのU相結線図である。

【図10】 好適な実施態様における未展開セグメントセットを示す側面図である。

【図11】 変形態様における好適な実施態様における未展開セグメントセッ

トを示す側面図である。

【図12】 好適な実施態様における未展開セグメントセットを示す側面図である。

【図13】 従来の凹部付きセグメントセットを示す側面図である。

【図14】 従来のセグメントセットの頭部側コイルエンドを示す径方向模式断面図である。

【符号の説明】

1 ステータコア

3 ステータコイル

33 セグメント (セグメントセット)

331 大セグメント (大回りセグメント)

331a、331b 大セグメント331のスロット導体部

331c 大セグメント331の頭部

331f、331g 大セグメント331の飛び出し端部 (端部斜行部)

331d、331e 大セグメント331の端部先端部

332 小セグメント (小回りセグメント)

332a、332b 小回りセグメント332のスロット導体部

332c 小回りセグメント332の頭部

332f、332g 小回りセグメント332の飛び出し端部

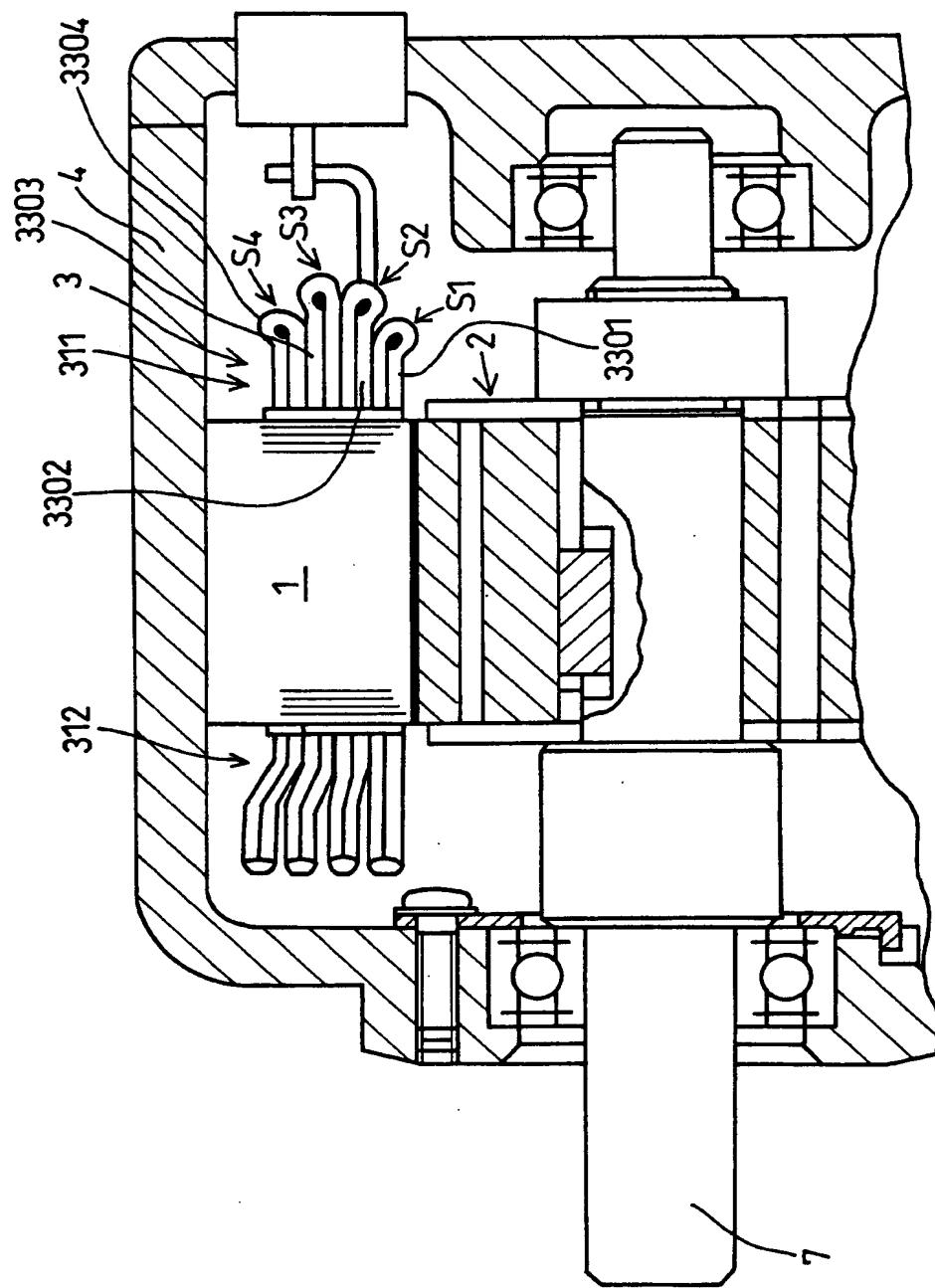
332d、332e 小回りセグメント332の端部先端部

35 スロット

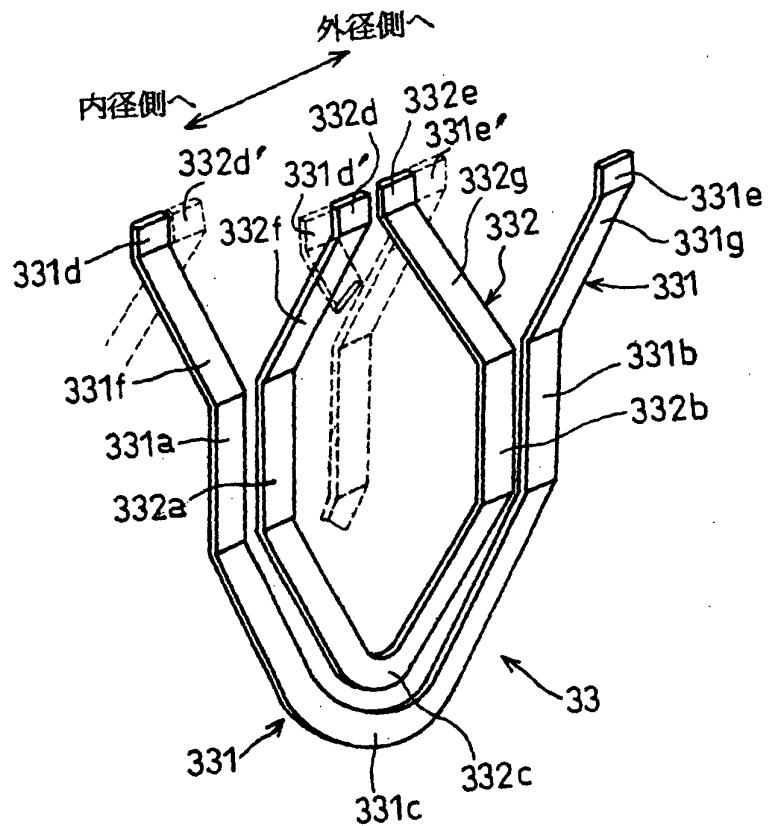
【書類名】

図面

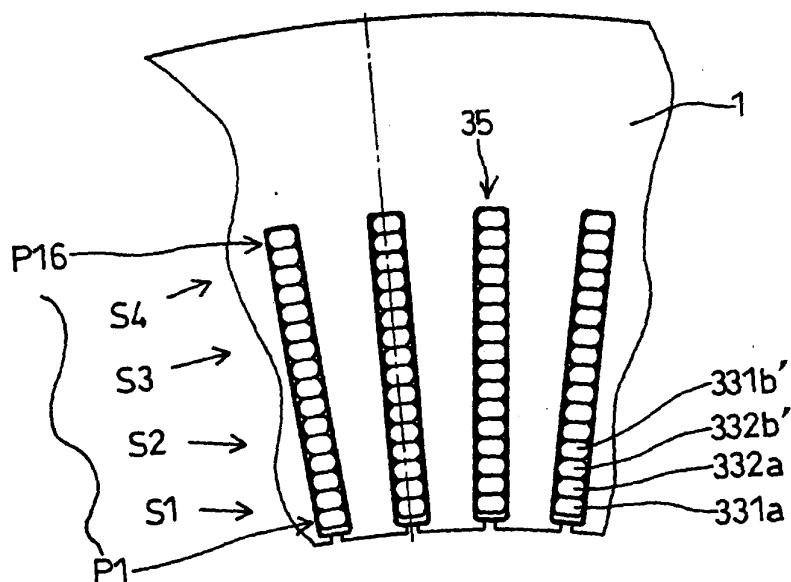
【図1】



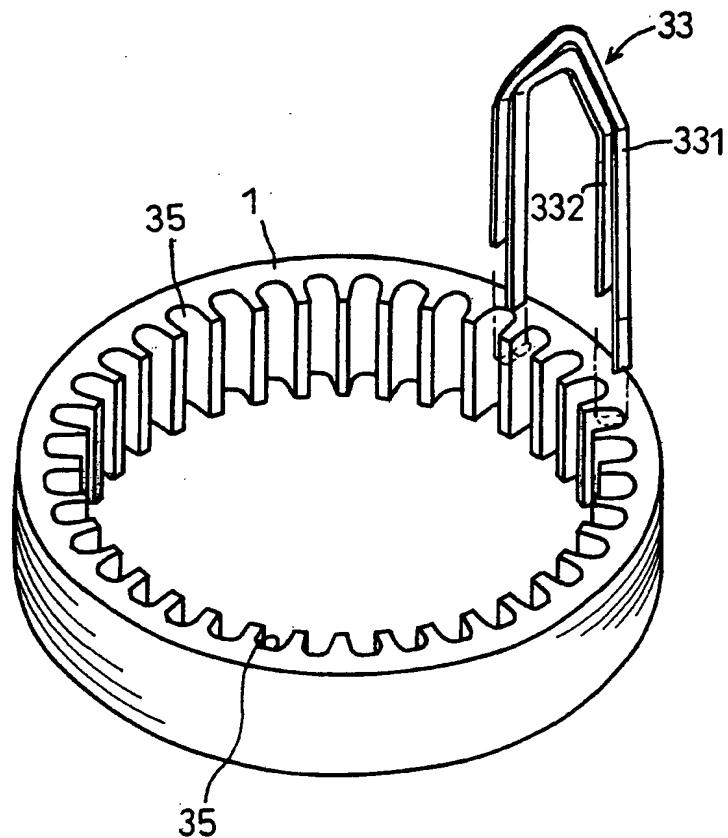
【図2】



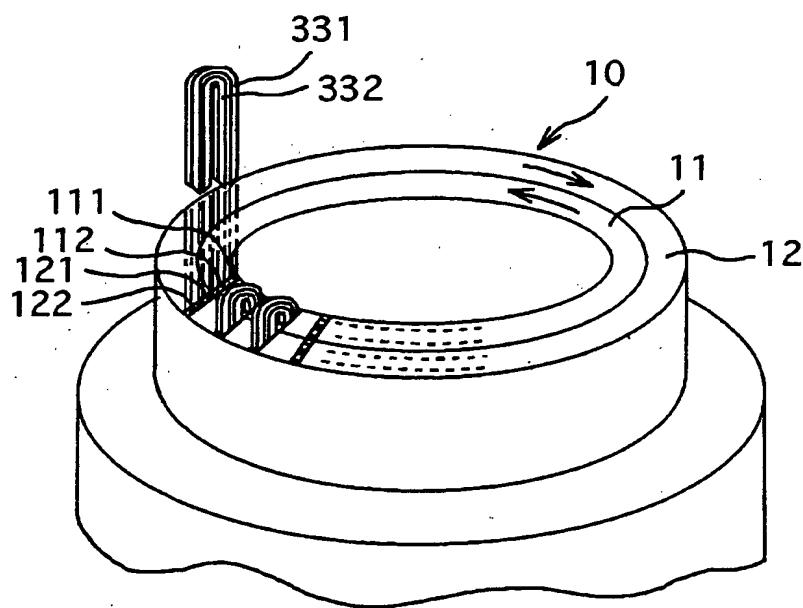
【図3】



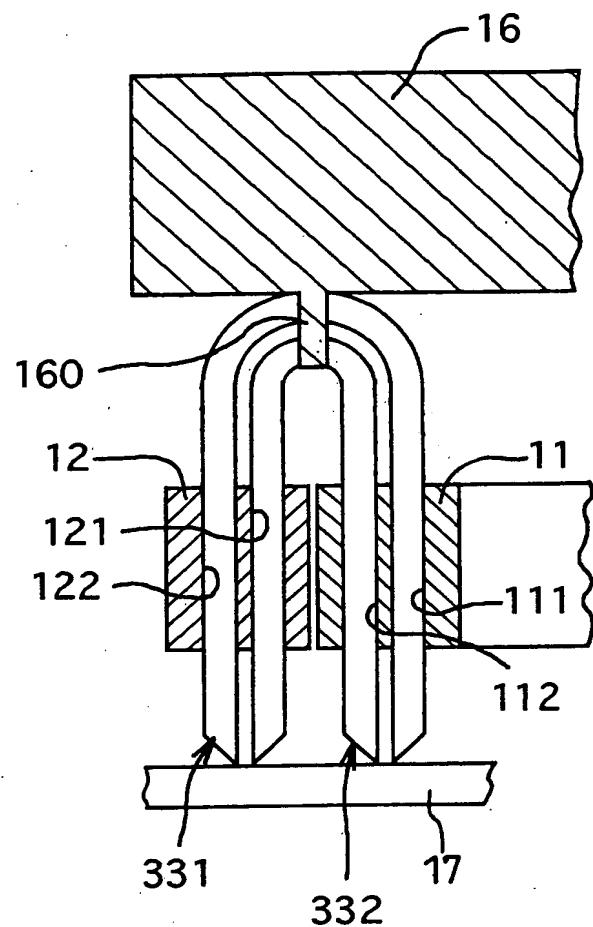
【図4】



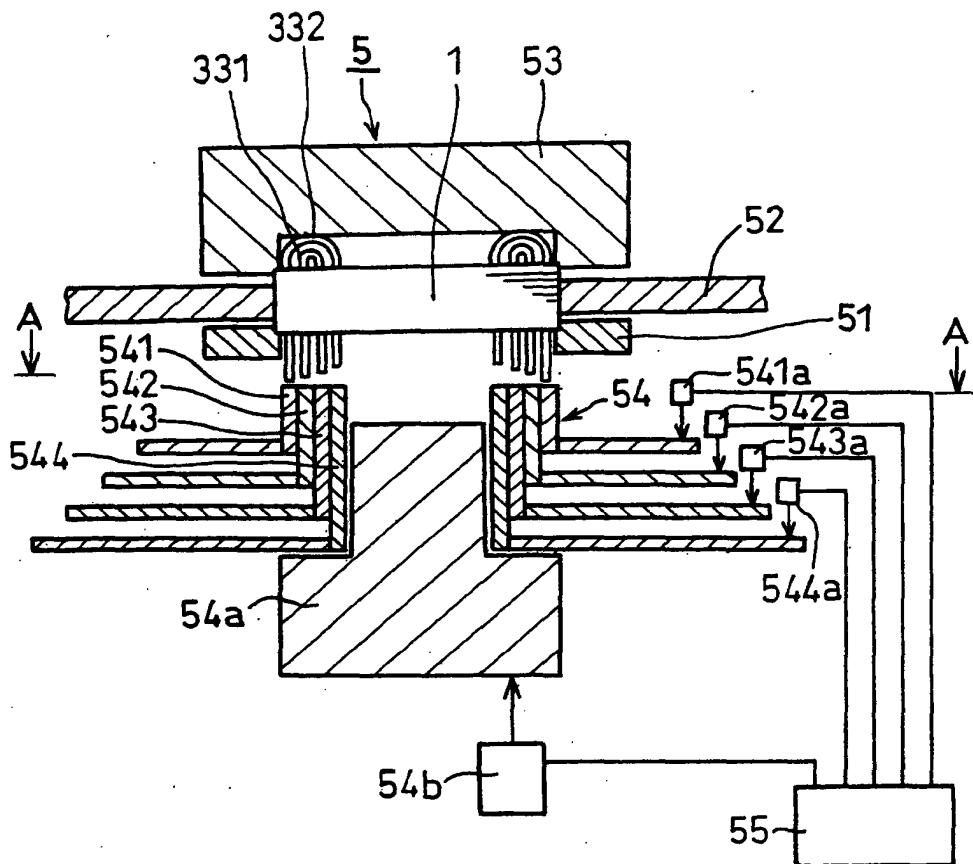
【図5】



【図6】



【図7】



1:ステータコア

541～544:捻り治具

5:ステータコイル捻り装置 541a～544a:回転駆動機構

51:ワーク受け

54a:昇降用シャフト

52:クランバ

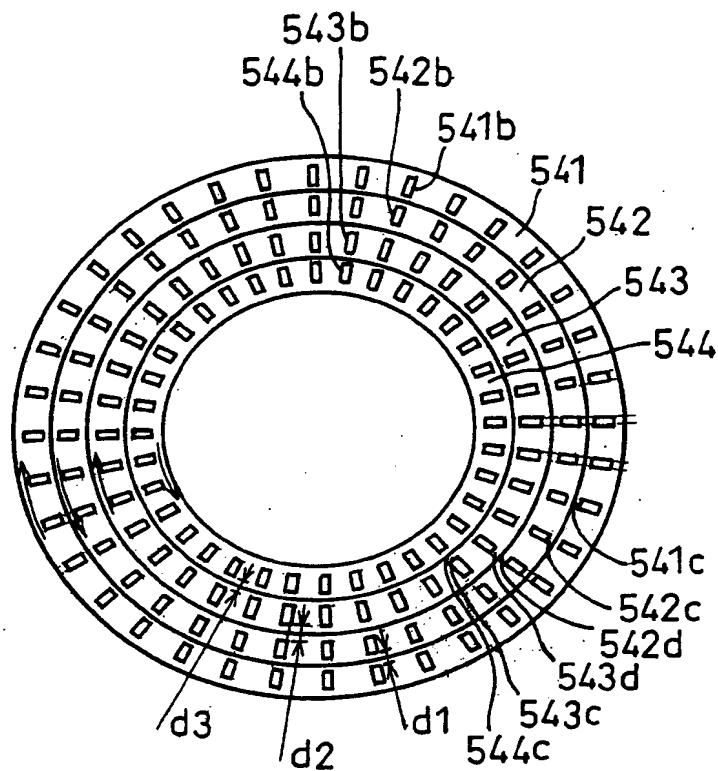
54a:昇降駆動機構

53:ワーク押さえ

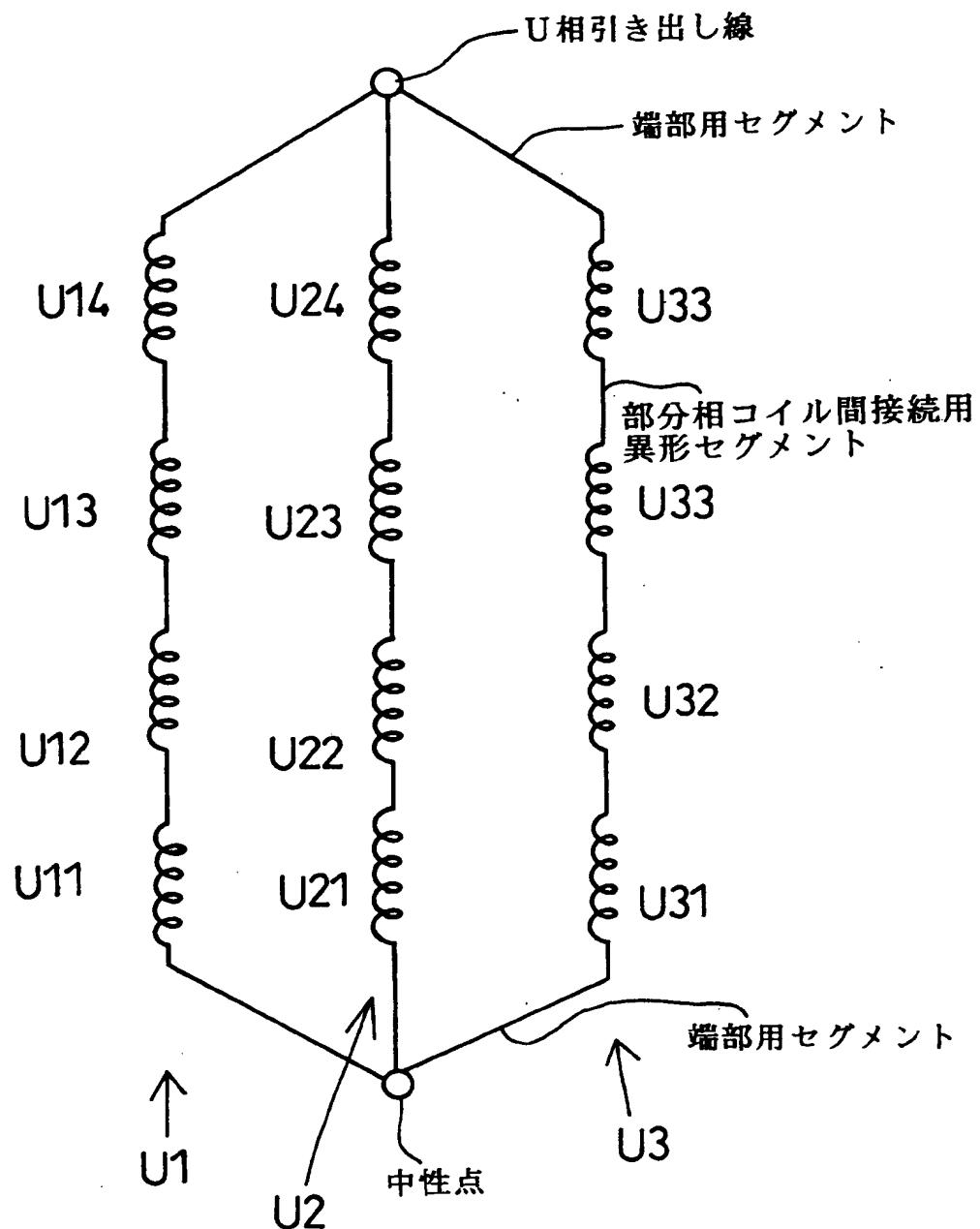
55:コントローラ

54:捻り整形部

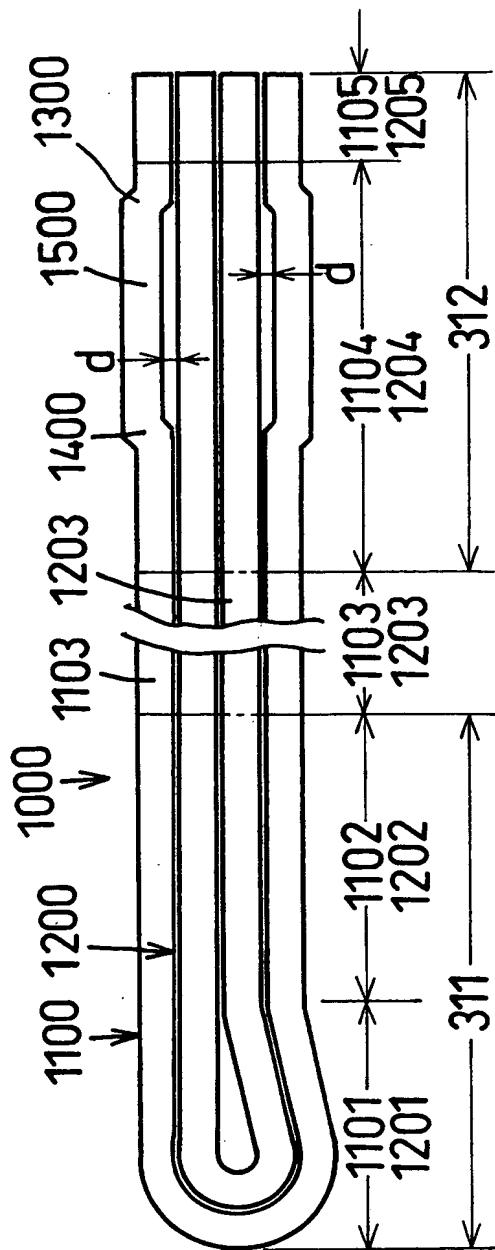
【図8】



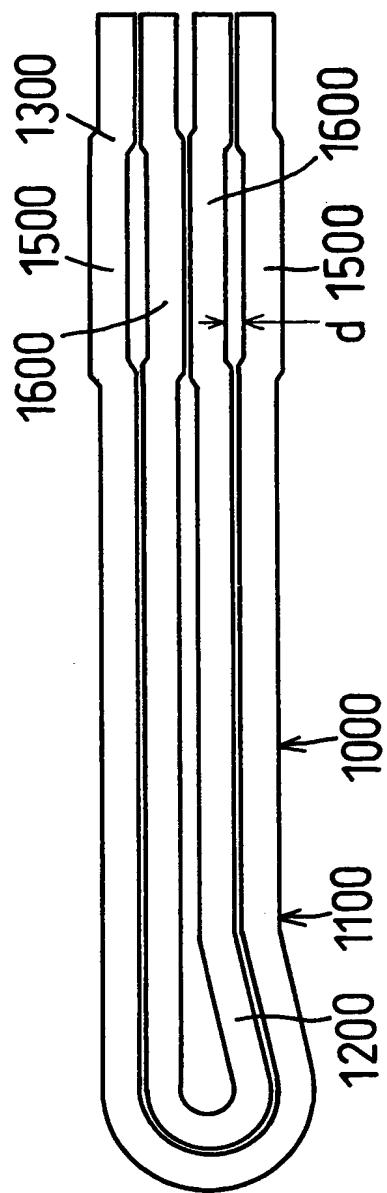
【図9】



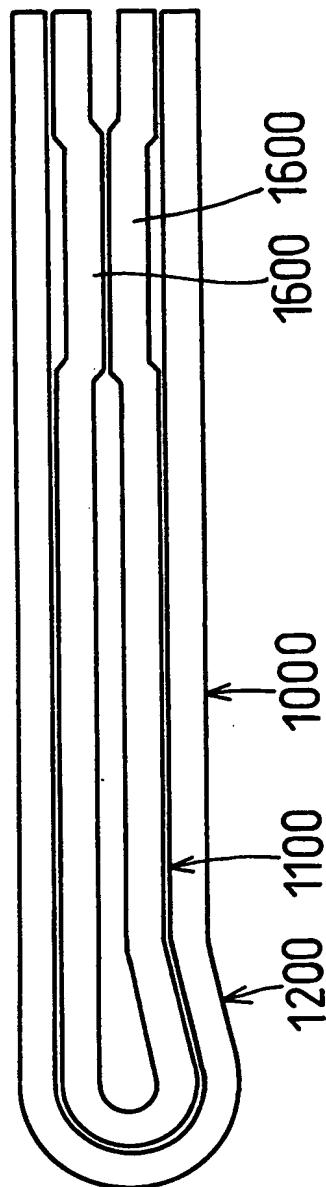
【図10】



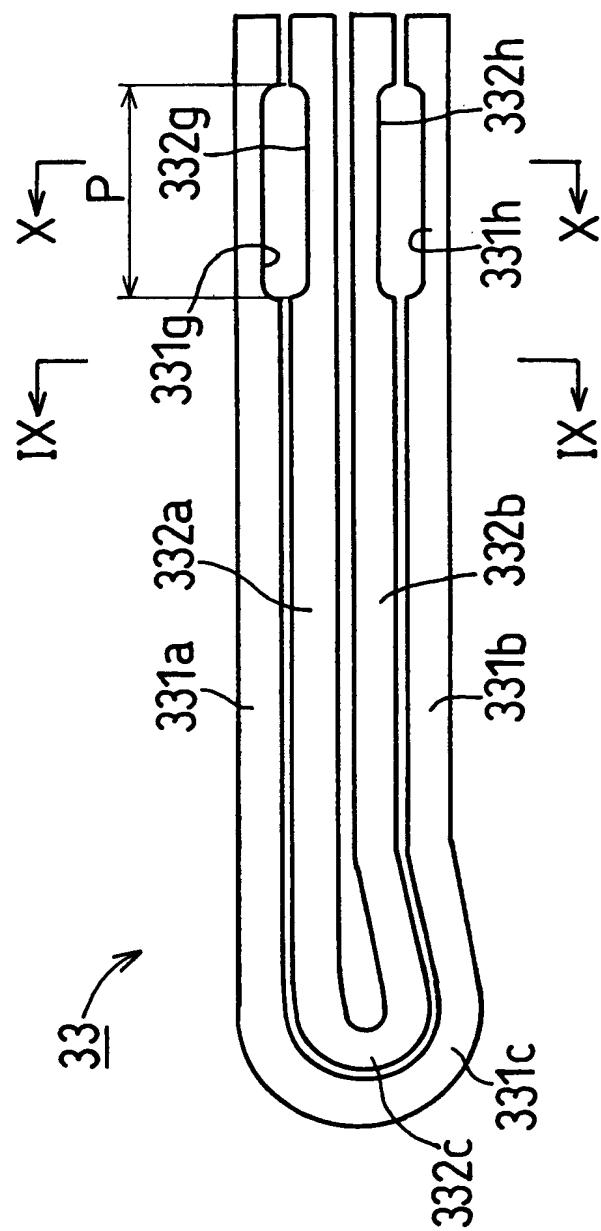
【図11】



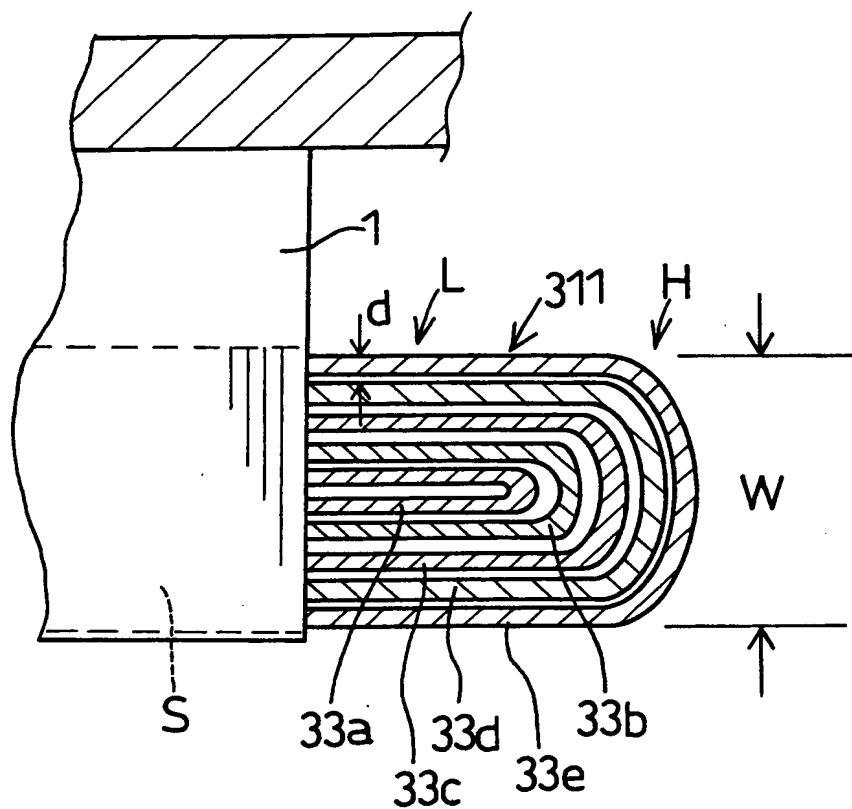
【図12】



【図13】



【図14】



【書類名】要約書

【要約】

【課題】絶縁皮膜に掛かるストレスの増大によるセグメントの電気絶縁性を抑止しつつ、端部斜行部間の電気絶縁性を確保すること。

【解決手段】セグメントセット33の端部先端部1105、1205近傍に位置して、大回りセグメント1100又は小回りセグメント1200の端部斜行部1104又は1204に互いの間に径方向隙間dを形成する曲部1500を形成する。

【選択図】図10

出願人履歴情報

識別番号 [000004260]

1. 変更年月日 1996年10月 8日

[変更理由] 名称変更

住 所 愛知県刈谷市昭和町1丁目1番地

氏 名 株式会社デンソー